



NPO法人 北摂こども文化協会
Hokusetsu Children Culture Association

VOL.
43

ハツクルベリ

Hackle Bally

- 北摂こども文化協会事務局
〒563-0024 池田市鉢塚3丁目4番13号
TEL:072-761-9245 FAX:072-761-9244
hokusetsukodomo@wombat.zaq.ne.jp
- 北摂こども文化協会豊能事務所
〒563-0101 豊能郡豊能町吉川336-1
TEL:072-738-3435
- 北摂こども文化協会西天満事務所
〒530-0047 北区西天満3-8-4朝日プラザ西天満101
TEL:06-6948-5380

Home Page URL <http://hokusetsukodomo.com/> ※検索サイトからは、「北摂こども」で検索！



2013年3月16日 音魂～Sunrise～ 第13回北摂太鼓集団フェスティバル

もくじ

七転び八起き	2・3
子どもや若者の育ちを支える職業	4・5
子育てエッセイ：やまGの育G日記	6
コラム☆おすすめの本／エッセイ	7
イベント・行事案内／入会案内／編集後記	8

七転び八起き

ソチ冬季オリンピックの開催中、テレビ放映が夜中から朝方というなか、テレビにくぎ付けになってひいきの選手を応援し、寝不足になった方も多かったのではないのでしょうか。

そんなソチ・オリンピックが終わり、寂しいような、心が手持ち無沙汰な感じを“ソチロス”と言うらしいです。

でも、こんな素晴らしいオリンピックは今までに味わったことがないほどの感動でした。まさに北摂こども文化協会のコンセプトそのものだったからです。

どこが?と思われるでしょうか。

どの種目のどの選手をみても、出会いから夢が生まれ、チャレンジを繰り返して数え切れないほどの挫折があり絶望があって、それでも希望の光を消さなかった選手たち。ここです。挫折や絶望の中にあっても、希望の光を自らが“消さなかった”んですね。“消えなかった”のではないんです。消さなかった自分が主体者なんですね。北摂こども文化協会の子ども若者支援コンセプトもそこです。子どもたちの主体性を育てたいと願い続けています。

今回15歳の少年から41歳の壮年までがオリンピックに出場しましたが、選手それぞれに人生ドラマがありました。スキージャンプで出場した41歳の葛西紀明選手は4年前の団体戦にはけがで出られなかったそうですが、今回7回目のオリンピックにして初めて個人メダルを獲得しました。1994年リレハンメルオリンピックに19歳で初出場し、そこから22年です。決してスター選手ではなかった青年が、来る日も来る日も精進を積み重ねて、自分への勝利をつかんだんですね。

スノーボードハーフパイプに出場した15歳の平野歩夢選手は、“いじめられっこ”だったことを自ら公表しています。学校を休んでスノーボードばかりやっているように見えた少年に、同級生たちは羨望と妬みがあったのかもしれませんが。日本の教育観では“学校へ行くこと”が一番の優先順位だったかもしれません。エジソンやファープルの伝記を思い出します。何かが突起する時、そこには“普通”ではない見極めがあります。それは大人の判断に委ねられることが多いと思います。

このことは、メダルを取ったから、有名な発見をしたから、と結果が出てから評価するのではないんです。結果がよかったから、その前の“普通でない”ことが許されるというものではないと思うのです。

彼を信じて支援する、彼の夢を支援する側の見極めが大切です。彼を信じる先にメダルが保証されているわけではありません。メダルを取れることを信じるのではなく、そこに向かって突き進む彼の思いの強さを信じるのです。メダルという結果はあってもなくても、それはいいんですよ。

メダルを期待されていたフィギュアスケートの浅田真央選手、高橋大輔選手らもメダルを取ることはできませんでした。でも、どんなにすがすがしいオリンピックだったでしょう。彼らの評価すべき点は、メダルではなく、いかに精一杯、自分のできることをチャレンジしたかということでした。特に浅田選手は、日本国民すべての人々の期待を背負いながらもショートプログラムに失敗し、茫然自失の状態から、“無”になって滑ったフリーの演技は最高でした。

失敗は誰でもするもの。立ち直って完璧な演技をした浅田選手は素晴らしい。でも、ここでもう一度失敗していたとしても、それはそれでいいですよ。要はこの4年間、目標に向けて挑み続けた姿勢がほめたたえられることなんですよ。高橋選手も町田選手も、鈴木明子選手、村上佳菜子選手も同じです。

スキーモーグル種目の上村愛子選手の涙と笑顔も素晴らしかったですね。彼女も悲願のメダルには届かなかったけれど、達成感に満ち溢れていました。まさに、自らが立てた目標に向かって、自らが積み重ねてきた足跡が、自信と確信を生み出したんですね。自分自身が自らの希望の光を消さなかったということでしょう。そこが北摂こども文化協会が掲げている“自分らしく歩む道のりが大切”ということなんです。

とは言え、メダルを獲得した各選手たちには、やっぱり「おめでとう！」ですよ。フィギュアスケートの羽生選手の特にショートプログラムの演技は見事でしたね。彼は東日本大震災の被災者ですが、今までもこれからも被災地復興支援に尽力したいと言っていました。被災者としての彼を支えたのはスケートだったんですね。そして彼がスケートを続けられよう支援して下さった方々が、彼をオリンピックチャンピオンに押しあげたのでしょ。

スノーボード女子竹内智香選手は金メダルを目前にして転倒してしまいましたが、悔しさも含めて“明日につながる最高の今”だったんですね。竹内選手にもスノーボードとの出会いがあり、挫折しても道が閉ざされても、前に突き進んでいったのは彼女自身の強い意志があったからだとなりました。

子どもたちは何が自分の目標になるかわかりません。子どもが人間になっていく成長期に、さまざまな出会いを提供したい。北摂こども文化協会はそんな思いで同世代、異世代の交流を通じた共に育ち合う「共育事業」を展開しています。

時は3月、この一年を締めくくると共に、新しい年度の企画を練り上げていきます。子ども若者自立支援の事業として、当協会が目指すところ、子どもたちが一年間の目標に対して到達感を実感できるように、じっくりしっかり進めていきたいものです。

今期もご支援ありがとうございました。引き続き来年度のご支援ご協力及びご鞭撻のほど、どうぞよろしく願いいたします。

(理事長・立石美佐子)

子どもや若者の育ちを支える職業

90年代後半、地域課題にこたえるNPOが誕生し、2003年には指定管理者制度を背景にそれらのNPOも公共事業を担うようになりました。結果、近年では地域で子どもや若者の自立を支援することを職務とする人が増えました。例えば児童文化センターの運営を担う当協会の職員も、これらの人々と言えます。

イギリスの場合は、これらの人々は「ユースワーカー」や「プレイワーカー」等と呼ばれ、専門職者あるいはボランティアとして活躍しています。専門職は有資格であり、大学での学びが義務付けられています。ボランティアであっても研修の機会が用意されており、双方ともに力量形成を遂げる仕組みが保障されています。

一方、日本の場合は、イギリスのような養成制度が確立しておらず、全国的に認められた資格も存在していません。それゆえに、学校以外で子どもや若者の教育活動に携わることを職務とする人々の社会的立場は弱く、研修の機会も十分には保障されていないのが現状です。

このような現状を鑑み、昨年9月に、社会教育学会の学会員（研究者や実践者）が中心となって「子ども・若者支援専門職養成研究所」を設立しました。筆者も立ち上げに関わったメンバーの一人です。

研究所の目的は、「子ども・若者支援専門職に関する総合的な調査および研究を進め、『子ども・若者支援士』（仮称）の専門職化を目指すこと」です。

社会教育の現場で活躍している人々が培ってきた力量や必要だと思っている力量を検討することで、地域で子どもや若者の教育や支援に携わる人が身につけるべき力量や専門性を特定すること。その上で、検討結果を反映させた養成制度を構築することを目指しています。筆者としては、当協会をはじめとする現場職員の力量が正當に評価され、また養成制度を活用することによって更なる向上へとつながることを期待しています。

昨年末には設立後、初となる集中学習会を開催しました。題して「社会教育を中核に据えた『子ども・若者支援専門職』確立の可能性を探る」。就労支援、障害児者支援、青少年施設運営、学習支援・余暇活動の提供、学童保育の各領域の現場職員にご登壇いただき、現状をご報告いただくと共に、フロアーを交えての意見交換。地域で子どもや若者の教育や支援に関わる人々の専門性とはいったい何なのか、専門職と言えるのか、資格は必要かなど話し合いました。

当協会と同様、前身をおやこ劇場とし、地域密着型の文化・遊びの機会提供や放課後の学習支援活動を行っている「NPO法人山科醍醐こどものひろば」の場合、職員の中に、社会福祉士や保育士の資格を持つ者がいるとのことでした。

また、青少年施設の指定管理運営を行っている「公益財団法人よこはまユース」の場合、内閣府が主体となって開発した「ユースアドバイザー」の研修を受け、その名称の認証を取得している職員がいるとのことでした。ユースアドバイザーは、主に、自立に困難を抱える若者を対象とする支援ができる人材養成として開発された養成・認証制度と考えてよいでしょう。

当協会の場合は、歴代の職員の中には教員免許を持つ人もいましたが、資格は必ずしも必須の採用要件にはしてきませんでした。集中学習会に参加した当協会理事長に、感想も含めて資格や専門性に対する考えを述べてもらいました。

「12年前、当協会が子どもの社会教育施設である児童文化センターの管理運営委託を受けるとき、職員が教諭免許、社会教育主事、保育士、ソーシャルワーカーなどの資格を有していない事は問題になりませんでした。むしろ、資格のある公務員が縛りの中で実施していた運営からの転換が目指されました。資格の有無より、子どもたちの環境をどう作るかという思いの有無、強さが重要視されました。無資格だけど子どもとの関わりの実績が既にあるということが評価され、実務経験に基づいて子どもの成長に必要な環境を生み出していく力があり、自由な発想で取り組むことができる点が評価され期待されていました。

ただ、十数年も続けてくる中で、社会状況も変わってきました。経験に加え知識と知恵が必要になってきました。現在の思いは資格より研修の方がより必要だと感じています。なぜなら、子どもを取り巻く環境が目覚ましく変わる中で、子どもの心身を理解した対応をするためには、子どもの発達や成長のメカニズムを知っておけば、より適切な対応が可能になるからです。

一方で集中学習会に参加したことで、職員のモチベーションとキャリア評価の観点から、資格の必要性があるかなとも思いました。少なくとも10年間、子ども・若者支援事業に従事してきたこと、そのことは評価されることだと思っています。10年間、経験を積み上げることは「専門家」と評価されていいと思います。そこには日常の工夫と課題への挑戦があるはずで、逆に言えば、このくらい緩やかでいいのではないかと思っていました。

専門家という資格があって採用されるのではなく、積み重ねた経験により資格が生まれるというあり方です。そして実践する専門家としては、経験の力、子どもを視る力、対処する力、分析する力、そしてつなげる力が必要であると考えています。これらを資格化するというのはどういう方法があるのか、一層の興味がわきました。

子ども若者支援専門職の研究は始まったばかり。今後の展開にご期待下さい。

(理事・立石麻衣子)

やまGの育G日記 その14 ～お父さん死んじゃうの？～

生まれた時からこの育G日記で取り上げてきた長女も4月から小学生1年生。

親の僕でも早いな～と感じるくらいなので、知り合いに話すと「はっやいな～！この前生まれたばかりやのに」とびっくりされる。

そんな長女があるとき一緒にお風呂に入っていると、途中まできゃっきゃと笑って遊んでいたのに、いきなりクスクスンと泣き出した。

湯船の中で一緒に楽しくお話ししていたので、泣くきっかけが微塵もなく戸惑った。幼稚園でなにかあったのかと思い、「どうしたん？ 今日何かあったん？」と聞いたが、なかなか答えず。頭をなでて落ちつかせ、口調をゆっくりして繰り返し聞いてみると、「ねえ、お父さんとお母さんは私より先に死んじゃうの？」という答え。

泣き出した理由として予想外でありそもそも6歳の娘が「死」をどう理解しているかもわからなかった。

「死ぬってどういうことか知ってる？」

「動けなくなって、食べたり、遊んだり、会えなくなるんでしょ？ そんなん悲しい。」

誰に教えてもらったのかわからないが、いずれにせよそういう説明を聞いて娘なりに「死」を理解したのだろう。

僕自身小学生の頃、自分もいつか必ず死ぬ時がくると自覚したとき、その瞬間を想像してめちゃくちゃ怖くなった記憶がある。娘は死を自分には置き換えていなくて、親に置き換えて悲しんでいる。

「誕生日がくる回数はみんなだいたい決まってるから、お父さんたちは先に死んじゃうかもしれないけど、まだまだ先のことやから心配しなくてもいいよ。」

「じゃあ、じいじとばあばは誕生日いっぱい来てるから、明日の明日くらいに死ぬんちゃう？」

「じいじもばあばもまだまだ元気やし大丈夫。さっきも電話でめっちゃ元気やったやろ？ でもいつ元気じゃなくなるかわからへんから遊べるときにいっぱい遊んでおこうな」

「うん、わかった。また今度じいじとばあばのところに遊びに行く。そのとき、雪見だいふく買ってもらわ。」

余計な思惑がひとつ入ったような気がするが、家族と過ごす、限りある時間の大切さを少しでも分かってくれたら良しとしよう。

娘とそういうやり取りをしていると僕自身、10年ほど前に亡くなった祖母のことを思い出した。お祖母ちゃん子だった僕は子どもの頃からよく祖母の家に遊びに行き、夏休みの時など何日間も泊まったりしていた。僕が大学生になった時、祖母は痴呆症がかなり進行しており、一年間祖母の家で一緒に過ごしたが、その時には僕が孫であることもわからなくなっていた。毎日夕方6時になると「あんた、いつまでもよその家におったらあかん。家の人心配してるから早よ帰りい。」という感じだった。

「そうやね、そろそろ帰るわ。また明日ね。」と玄関から出ると安心してくれる。30分ほど散歩して帰ると、祖母の記憶はきれいにリセットされており、「お祖母ちゃんの孫やで。遊びに来たよ。」と言うと信用して入れてくれた。

今のところ僕の両親は身心ともに元気だが、母の方は天然ぶりが激しくすでに心配。頑固者の父はなったらなっただで大変そう。

とりあえず今は両親が元気に娘や息子と遊んでくれている日常を、僕もしっかり記憶しておこう。

おすすめの絵本

今回は乗り物絵本のご紹介です。乗り物の絵本はとて沢山出版されています。

図鑑的なもの、仕掛け絵本やファンタジックなもの、物語性の豊かなものなど。多種多様な表現を楽しんで下さい。絶版本も紹介していますが図書館でなら出会えます。

『てつたくんのじどうしゃ』

作 渡辺茂男 絵 堀内誠一

福音館書店 (重版未定)

てつた君が歩いていたらくるま(車輪)がにこにこ転がってきます。今度は棒が2本トントンとやってきて。シンプルに部品の組み合わせで車ができてるのが小さい子にもわかります。完成した自動車にてつた君は誰を乗せて帰るのでしょうか。

『ダンプのがらっぱち』

作 渡辺茂男 絵 山本忠敬 偕成社 (絶版)

真面目なダンプのこんごうがある出来事をきっかけに変わってしまう。悲しい話ですがこんな絵本にも出会って欲しいです。

『しょうぼうじどうしゃの あかいねじ』

作 たるいしまこ 福音館書店かかくのとも

さとし君の宝物は赤いねじです。消防自動車ってどうやって作られているのでしょうか。一緒に工場見学に出かけてみてください。

『よこながきしゃぼっぼ』

作 リチャード・スキャーリ

編 きたむらかずお 大日本絵画

スキャーリおじさんの絵が最高に楽しい。全長3m近くになる、仕掛け絵本。一緒にバナナを捜してあげて。

『地下鉄のできるまで』

作 かこさとし 福音館書店

みるずかん かんじるずかん

「だるまちゃん」と「てんぐちゃん」や「からすのパンやさん」などの作者です。地下鉄ってどうやってできるか知っていますか？知らない世界を覗けます。加古里子さんは工学博士でもあります。

(会員・尾崎望)

ほんとに人間は

突然、陸前高田の一本松についての作品依頼がきて、何も見ずに書くわけにはいかないので、1泊2日に出掛ける事にした。クラルテの人が仙台空港からレンタカーで連れてくれ、大いに助かりました。さすがにもう、町中に瓦礫はなくなっていました。壊れた家そのまま残っていたりしていました。

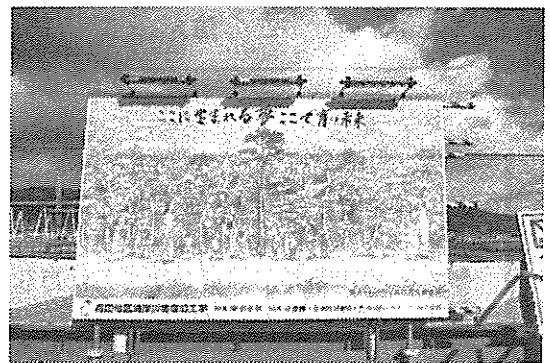
一本松はひょろひょろと立っていて、レプリカはレプリカだと思いました。特に私は命ない物に命を与える事を職としている人形劇人なので、命なく立っている松、その松には仲間がみんな津波で倒されても、一人頑張っていたというドラマがあるだけに何とも淋しく感じるので。それでこの製作費が1億5千万とか。批判じゃないつぶやきです。なにもない、ひろーい工場跡や壊れたお墓を見ていると思わず「うーんオリンピックねえ」とつぶやきが出ました。

何か割り切れない気持ちしているとソチオリンピックが始まって、町ぐるみでソチオリンピックを楽しんでいる所があるというニュースが流れました。新潟県柏崎市に曾地という地名があって、オリンピック開会宣言などをして小学校のグラウンドで何やら競争していました。

そういえばオバマさんがアメリカの大統領になった時、福井県小浜市がオバマではしゃいでいましたね。見ていて、オバマ大統領が何か恩恵をもたらしてくれるのかなと思ったのを思い出しました。

津波になる前の高田の松原というユーチューブを見て、一本松の所にあった看板に松林で幸せそうに楽しむ人々の絵が描いてあるのを思い出していたら、大阪市の市長が自分の意見が通らなかったで市長を辞職というニュースが飛び込んできた。選挙の費用が何億円とか言っている。

新美南吉の童話で子狐に「人間は怖いからね」と言い聞かせて、一人で手袋を買いに行かせ、ちゃんと手袋を買ってきた子狐の話を聞いて、「ほんとうに人間はいいものかしら。」と母狐はつぶやく、あの場面を思い出しています。



(人形劇団クラルテ・松本則子)

イベント・行事案内

池田市立水月児童文化センターのイベント!

五月山 & 水月

児童文化センターフェスタ

～わくわくスタンプラリー～

日時：2014年5月5日(月・祝)

場所：水月・五月山の両児童文化センター

内容：水月・五月山両センターのイベントに参加してスタンプを集めよう!



お問い合わせは、センター事務所(072-761-9233)まで!

詳しい情報はこちらで見られます【水月児童文化センターHP】
<http://hokusetsukodomo/suigetsu> スタッフのブログもあはす。

会員随時募集中!!

「もっと自分らしく、各合言葉に、北摂子ども文化協会が活動しています。」

年会費：◆正会員(総会議決権あり)10,000円
◆賛助会員 個人 一口 3,000円
 団体 一口 5,000円
 法人 一口 10,000円



第14期



ひと山まるごとプレイパーク メンバー大募集!

大自然のふとこで思いっきり遊びほうけよう!
自分の居場所がきっと見つかるはず...

◆活動日：4月20日、5月18日、6月15日、7月20日、
8月3日、9月13~14日、10月19日、
11月16日、12月7日、1月18日、2月15日、
3月8日

◆活動場所：豊能町木代の山

◆活動費：12,000円/年

※別途正会員費10,000円(一家族)
原則親子参加(4歳未満無料)



興味のある方は、当協会「ひと山事務局」
までお気軽にお問い合わせください!

お問い合わせ・お申し込みはこちらまで

●北摂子ども文化協会事務局

TEL:072-761-9245

FAX:072-761-9244

E-mail:hokusetsukodomo@wombat.zaq.ne.jp



編集後記

2年ほど前からうすうす気づいてはいましたが、どうやら僕もりっばな花粉症になったようです。去年までは外に出ると鼻がむずむずするなあという程度だったのが、今年はいくしゃみが出るわ出るわ、目がかゆくて仕方ないわの生き地獄。目を取り外してタワシでゴシゴシ洗ってしまいたいくらいのかゆみ。

今までひどい花粉症の母に対して「くしゅんくしゅん、くしゃみしてうるさいねん!」とか「ウサギみたいに目真っ赤にしてからに」など心無い言葉を浴びせていたことを反省。

信じられないような最先端の医療技術などがよくテレビで紹介されたりしていますが、花粉症をパッと治せる特効薬はいつになったらできるのかなあ。(山)